

## オペラ 演出家



### 直井 研二

栃木県塩谷郡出身。

1968年宇都宮短期大学附属高校音楽科卒業(第三期生)。

72年東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。73年NHK主催イタリア歌劇団公演の演出助手を皮切りに今日まで数多くの舞台に従事する。81年には文化庁派遣芸術家在外研修員としてウィーン国立歌劇場とニューヨーク・メトロポリタン歌劇場でオペラ研修を行う。演出作品は聴視覚のバランスのとれた空間設定と舞台構成の明快さに定評がある。演出作品には数多くの海外の作品や初演を含む邦人作品が多数ある。また栃木県民オペラ他、全国各地のオペラ団体に長年貢献し、三菱UFJ信託音楽賞や佐川吉男音楽賞奨励賞等を複数回受賞している。東京藝術大学では、1977年から後進の指導とオペラ定期公演の演出と制作に携わる。美術学部との共同制作によるラヴェル作曲《スペインの時》《子供と呪文》、松下功作曲《遣唐使》等をはじめ、2018年の《魔笛》まで多くの定期公演を演出した。学外連携公演や特別公演などを積極的に行い、各地域の文化振興・活性化の面でも寄与してきた。藝大の他に東京学芸大学、桐朋学園大学、二期会オペラスタジオでの指導をしてきた。海外では、イギリス、イスラエルでのバレエ公演や、豪州キャンベラ大学、中国西安市の国立陝西師範大学、国立台湾師範大学でもオペラの指導と演出を行ってきた。

栃木県内の活動では、県民オペラで1981年から20年余にわたり《蝶々夫人》《那須与一》《日光》などを多数演出。宇都宮短期大学では、シテライフ学部開設記念特別演奏会や創立40周年記念宇短大祭オペラ《泣いた赤鬼》、栃木県地域文化芸術振興プラン推進事業《悠久の時空を超えて》、創立50周年プレイベント/平成26年度「彩音祭」メインステージ《椿姫》などを演出している。また同学園内で、実践を活かした「音楽キャリア講座」も担当し、附属高校では、2年生の藝大見学のコーディネーターや特別授業「オペラ講習会」の講師を務める。

現在、宇都宮短期大学音楽科・同附属高等学校音楽科特別講師として後進の指導に当たる傍ら、フリーのオペラ演出家として活動している。

## 1. はじめに

劇場は、観客が日常を忘れて「夢」を求める場所です。オペラは総合舞台芸術といわれ、音楽はもちろん豪華な舞台装置、衣裳や照明、音響効果などが一体となった宝箱です。

では、これからミュージカルの源流でもあるオペラの世界をのぞいてみましょう。



オペラ「道化師」第1幕

## 2. オペラの誕生と流行

ルネッサンスの気運の中、イタリアのフィレンツェには、新しい文化を創ろうとする貴族や芸術家たちが集うサロンがありました。そのサロンの一つが、言葉が伝わりやすい新しい音楽劇を創ろうとしていました。やがて、彼らは古代ギリシャ悲劇をヒントに、独自の作品《ダフネ》を創作します。レチタティーヴォ(叙唱)という語るような歌い方が考案され、聴き取りやすく物語の理解が容易になりました。1597年のことで、これがオペラの誕生と言われています。

やがて、オペラの父と呼ばれるモンテヴェルディがヴェネチアに登場し、場面によって楽器を振り分け劇的表現を大幅にアップさせました。その後1637年に庶民が楽しめる初の歌劇場が建てられ、オペラは爆発的な人気を得ます。その魅力は「興奮を誘うドラマチックな音楽」や「機械仕掛けの舞台装置」の登場にもありました。オペラは、ここヴェネチアで大衆文化として根付き、観客は入場料を支払って、日常を忘れ「夢と幻の世界」に酔いました。

その後、オペラはヨーロッパ各地へと伝わり、18～19世紀には世界へと広がります。その中各国では、固有の音楽や言語と融合し有能なオペラ作曲家たちの野望の的となり、独自の文化として発展し定着しました。



クラウディオ・モンテヴェルディ  
1567-1643

### 3. オペラは壮大な共同作業



オペラ公演に携わる部署は上図のようにとっても多く、約 40 種類 300 人を超える場合もあります。それぞれが重要なポジションで、お互いの理解と協力によって本番が成立します。華やかな舞台で名アリアを歌う歌手も、裏で多くのエキスパートに支えられているのです。

最も重要なポストである指揮者と演出家は、本番の約 1 年前から公演の全体像をプランし、音楽スタッフや各デザイナーと綿密な打ち合わせを重ねながら、具体化させていきます。

それと平行して、指揮者は音楽稽古、演出家は立ち稽古(演出稽古)を行い、演奏者とスタッフの作品に対する方向性を整えていきます。

## 4. 稽古で自信をつける

「楽譜を読み返して！」や「本番をイメージして！」という注意や指導は、稽古場で頻繁に出てきます。「楽譜」は原点で、そこから湧き出る「想像力」こそ、作品を仕上げる源です。オペラの楽譜には、ト書きを含め多くの情報が書いてあります。

正確な譜読みや立ち稽古前までに 150%の暗譜が必須です。そうすれば、ぎこちなさは消えて、身体は自然に動きます。



立ち稽古風景

稽古の締めくくりは、本番の舞台で行うゲネプロ(G.P と記

し、意味は総稽古)です。照明や衣裳メイクやかつら等

本公演と寸分違わずに行います。関係者全員が最後の確認をする場で、安全を確保するためにも重要です。

本番は一本勝負！ さあ、舞台と客席の夢の共有へ Let's go !!

## 5. 夢を叶えるために

- 常に良い作品を観・聴きし、感動したことは書き残し心に蓄えよう。
- 将来の「夢や希望」は、いつでも見える場所に貼っておこう。
- 日々の稽古(練習)こそ、本番を成功へ導く。暗譜だけでなく、時代や文化も取り込んで複層的に覚えると自信につながる。
- 大ホールに入ったら、先ず客席から舞台をじっくり見よう。そして、一番自分を美しく見せる姿をイメージしよう。あなたが指揮者や演出家となって、作品全体を描いてみよう。
- 次に実際に舞台に立ち、描いた通りの動き(発声や芝居)をしてみよう。舞台照明は頭上から照らされるので、姿勢を良くすればかっこ良く、素敵に見える。好きな匂いを想像すれば、呼吸や表情が良くなり瞳も輝く。
- 作品をリスペクトし、観客への感謝の気持ちを持つことで、演じることに深みが増し、あなたの表現が更に豊かになる。
- 舞台リハーサルでは、あなたの姿や出す音のベストを、ホール全体に覚え込ませよう。その記憶が、本番で味方となって一緒に響く。
- さあ本番、天空まで届く自分をデザインして Toi,Toi,Toi !!